



伊与田瑞穂(いよだみずほ)

年齢／17歳

身長／161cm

体重／42kg

BWH／89・50・91

地元の普通高校に通う、女子高生。政治家の娘として生まれ、厳しく躰けられた、箱入りお嬢様。文武両道で、容姿端麗。性格は穏やかで、厳格。家族や友人に恵まれ、優しい性根を持つ。人を愛し、愛される事に喜びを感じる、普通の女の子でもある。しかし、お嬢様育ちのためか、世間知らずな一面もあり、天然。ハイスペックでありながら隙も多く、時々お馬鹿な行動を取る事もある。そこも、愛らしいと評判で、上級生からも、下級生からも人気だった。その美しい容姿と、穏やかな性格から、男女問わず告白を受けるが、婚約者が居る為、断っている。政略結婚なのだが、当人同時は以前から親しく、結婚を強制された際に、想いを確かめ合ったので、普通に将来を約束し合った恋人同士となっていた。最初は清い付き合いだったが、両想いの若い男女が、いつまでもプラトニックでなど居られる筈も無く、数か月前に、深い仲に。以来、親の目を盗んでは、郊外の高級ホテルや、男の自宅へと赴き、密かに愛し合っていた。

放課後。バレー部の活動場所である体育館。そこには、特に部活動はしていない瑞穂が立っていた。運動神経もそこそこある瑞穂は、バレー部の助っ人として練習試合に参加していた。

「誰あれ。あんな美人居た？ 凄いジャンプ力」

「ああ、助っ人らしいよ。某有名政治家の娘さんだって」

相手校の部員も、瑞穂の美貌に注目する。立ち振る舞いからして、他の女子とは違っていた。

「おっぱい大きくない？」

「大きいね。庶民とは食べてるものが違うのかしら」

体操服姿の瑞穂は、そのグラマラスなスタイルが際立っていた。よく見ると、関係無い男子生徒が、二階の通路からギャラリーとして参加している。美貌のお嬢様の瑞穂は、男子生徒からの注目度も高かった。主に性的な意味で。

「伊与田さん、彼氏が居るって本当？」

好奇心で、その場に居た女子が聞く。これ程の注目度を誇るお嬢様の恋愛スキャンダルである。気になるのも当然だった。

「彼氏ではありませんわ。親が決めた許嫁ですの」

やれやれ、と困ったように言う瑞穂。流石に政治家の娘ともなると、結婚相手は自分では決められないらしい。

「好きでも無い人と、結婚しなきゃならないって嫌じゃない？」

「もう諦めてますわ。これが私の運命なのです。まあ、悪い人では無いですし…」

特に興味無し、といった雰囲気。結婚と言っても、まだまだ先の事である。社会勉強として、大学を出た後も、暫くは社会人として働き、それからの話である。恐らく、10年は先の事だった。

「皆さんは、どうか素敵な恋をして下さいね」

そう言って、花のように微笑む瑞穂に、その場に居た誰もが魅了されるのだった。



体育の授業中。今日は、陸上競技である。機材などの準備の手間もあり、男女とも同じ校庭での集合だった。

「エロいなー、女子」

「高校生つつたら、もう大人と同じだからな」

普段、滅多に目にしないであろう、露出の多い女子の姿に、男子は大騒ぎである。

「どいつもこいつも、男を誘ってやがる(言い掛かり)」

体操服姿の15~18歳の女子の露出度の高い恰好は、まるでグラビア撮影風景である。絶滅危惧種のブルマ姿。ほぼ下着と面積が変わらないそれは、足の付け根まで露出し、暴力的なまでの色気を醸し出している。

「あん中には、もうセックスしてる奴も居るんだろうな」

「あー俺もセックスしてー」

男達の淫らな視線に、嫌悪感を示す女子。

「こっち見んな男子」

「別にお前らのためにこの格好な訳じゃ無いし」

年頃の女子は、男には自然と、嫌悪感を持つまだ若い未成熟な女の身体を守るための、防衛本能だった。



走り高跳びで、華麗にジャンプする瑞穂。そのグラマラスな肢体が宙を舞う。男も女も、皆見惚れていた。結果はミス。その大きな尻が、引っ掛かった。

「上手くいきませんでしたわ」

そう言って、僅かに舌を出す。気取らない笑顔が、かえって美しい。男は皆欲情し、女は保護欲に捕らわれる。美しい女は、それだけで人を魅了する。

『可愛いなあ……家に持って帰りたいわ』

『可愛いなあ……家で犯しまくりたい』

各々が、そんな欲望に支配されるのだった。

夜。高層マンションの一室で、生まれたままの姿を窓に移す少女。政界の大物の愛娘、伊与田瑞穂だった。

「そんな所に居たら、人に見られるよ」

「構いませんわ。何も恥ずべき事はないのですから」

その美しい裸体を、隠す事もせずに、正しい姿勢で部屋の中に立つ。形の良い乳房が、男の前で僅かに揺れる。先程まで、そこに居る男に、好きに揉まれ、吸われ、舐められ、誘惑し続けていた。

「まあ、向こうからは何も見えないのですが。私達の秘密の場所は」

ここには、何度も来ている。大きな窓が、マジックミラーとなっており、部屋が暗ければ一切外からは見えない構造である事も熟知している。ここは、瑞穂の婚約者である男の自室。幼い頃より、親の決めた許嫁だった。不本意な結婚だったが、瑞穂は器量の良い女である。相手が醜悪な人格でなければ、それなりに親しく出来る。しかし意外と、この15歳ほど年上の、婚約者の男は、好感触の男であり、瑞穂にとっても、好意的に映った。お互いの立場もあり、何度も会う機会があったため、自然と親しくなっていた。数年もすると、瑞穂は男に、好意を抱くようになる。少女だった頃は、『優しいお兄さん』といった印象だったが、今では違う。『愛する男』である。思春期の瑞穂。学校の友人に借りた少女漫画などの影響で、恋愛の美しさに憧れた瑞穂は、男を愛する術を知った。そこから、あつと言う間である。既に大人顔負けの知識と、子供を生むには十分に成長した身体を持つ瑞穂が、男との情事に溺れるには、時間が掛からなかった。

「君にこんな事をしていると知られたら、ただでは済まないね」

「ふふ、そうになったら…結婚すればいいだけですわ」

瑞穂は、もう結婚出来る年齢である。そもそも、勝手に結婚を決められて、セックスはするなというのは勝手が過ぎる。瑞穂はそう考えていた。だって、こんなに幸せであるのに。

「私は、あなたの子供を産むために存在しているのです。それに嫌だとは、全く思いません」

そう言って、優雅な足取りで、男の元へと歩く。そのヌードモデルのような美しい裸体を、惜しげも無く晒しながら。

「瑞穂ちゃん…綺麗だよ」

「嬉しい」

男は、瑞穂の事は、ほんの幼い少女の頃から知っている。目の前にいる淫らな女が、あの小さい少女と同一人物であるという事実が信じられない。この、凶悪な魅力を持った乳房が、あの小さな女の子のものなのだ。



「綺麗だ」

「はい…あなたも素敵です」

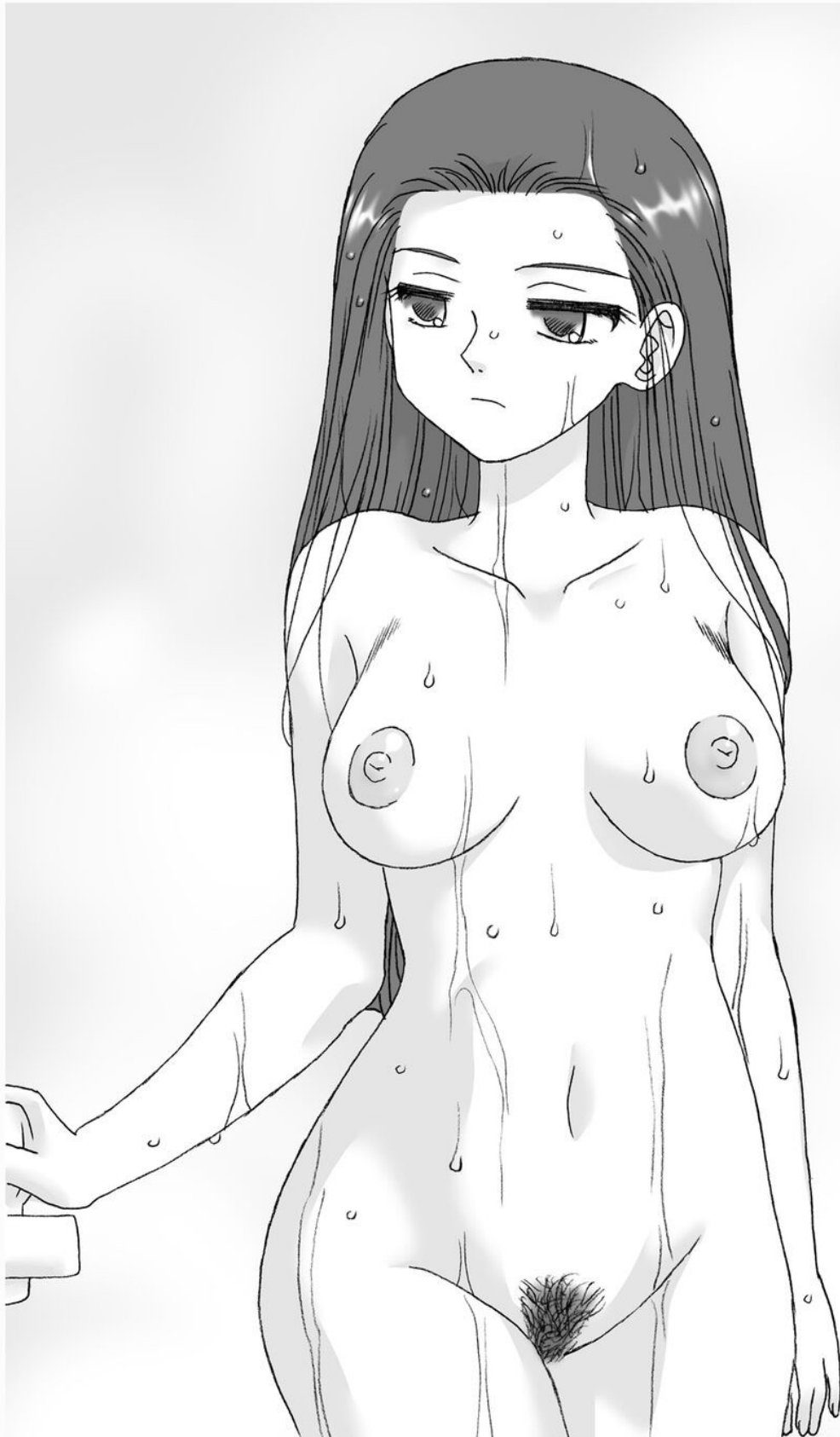
抱擁し、唇を重ねる。絡められる舌。乳房の先が触れ、固く尖る。勃起したペニスを、瑞穂の柔らかい手が握り込む。このセックスをするためにだけ存在する、男の肉棒を。

「抱いて…」

男は、傍にあったソファに瑞穂を押し倒し、一気に突き入れる。悲鳴のような喘ぎ声が上がリ、嬌声へと変わる。そのまま、何度も何度も突き入れられるペニス。まるでAV女優のような声を出しながら、愛の言葉を吐き続ける瑞穂。時折、淫らな言葉も。今時の若者である瑞穂は、お嬢様とは言え、淫らな知識もある。『おちんちん』『ちんぽ』などと、言いまくる。何せ、興奮するのだ。好きな相手との、淫らなセックスが。

「ああ……！あああ…んっ！す…凄い……！
ああ……！あなたの……！凄いわ……っ！
あん！奥に……奥に当たるう……！あん……！
はい……あなたが好き……！はい……！
セックス好き……！セックスしてもっと……！
ああんもっとお……！大好き！大好き！ああ！
はい……！出して……！ああんオッパイ……！
オッパイもっと揉んで！気持ちいい！ああん！」

三人は、何度も場所を変え、体位を変えながら、いつまでもセックスを繰り返し、中で射精させ、愛を確かめ合った。



ザアア——……

今日も、とあるクラブの助っ人で、放課後も汗を流した瑞穂。体育館とプールの間に設置されたシャワールームで、シャワーを浴びる。別に、家に帰ればいくらでも入浴も出来るのだが、綺麗好きの少女は、いついかなる時も、綺麗で居たいという気持ちがあった。

「明日は…」

熱い水を浴びながら、瑞穂は思いを馳せる。明日は、久しぶりに、あの人に会う。間違い無く、セックスをする。いや、したい。するのだ。本気で恋をしている瑞穂は、好きな男とは、キスもしたいし、抱き合いたい。セックスだってやりまくりたい。だってそれが、恋をするという事なのだから。瑞穂は、自らの身体を抱きながら、恋人の感触を思い出していた。

「……？」

その時、扉の開く音をする。それ程広くない場所に、数台のシャワールームが設置されたこの場所は、公用であり、様々の部活を行っている生徒達が、頻繁に利用する。今現在は、瑞穂のみだが、数人で混み合う事など珍しくも無い。同世代の少女達の裸を見るのが、最近ちょっとした楽しみである瑞穂。恋をしているせいか、女の裸に興味があるのだ。皆、どんな恋をして、好きな相手に、どんな風に裸を見せたりしているのか。女の身体も、色々な個性があって、興味深い。皆、瑞穂の身体を見て、「綺麗」とか「エロい」とか言ってくれるので、嬉しかったりもする。おっぱい触らせる代わりに、自分もおっぱいを触らせてもらおうかしら、とか考える。恋人が居る瑞穂は、何故男があんなにおっぱいが好きなのか、知りたいとも思っていた。瑞穂は、高校生。同世代の少女達は、例外無く『女』の身体を持っていた。つまり皆、エロい身体付きなのである。裸の女が群がるここは、もしや天国なのか、と思う。

『どなたかしら』

御機嫌よう、いつものように挨拶をしようとする瑞穂だったが。

そこに立っていたのは、全裸の男だった。

「な……っ」

瑞穂は驚く。ここは、女子用のシャワールームである。男が入って来るなど、常識では考えられない。男子が、間違えて入って来たのか、とも考えられるが、男の態度や表情には、何の迷いも感じられなかった。明らかに、意図的に入って来たのである。学校の敷地内で、堂々と、女子のシャワールームに。

「何故……ここは女子用ですわよ……！」

咄嗟に、バスタオルで身体を隠す。仮にも、嫁入り前の女子。赤の他人に、ましてや男に裸を見せるなど、あってはならない事だった。尤も、瑞穂自身は男に裸を見せるのには慣れていた。それは、たった一人の、心に決めた愛する男に対してだけだったが。

『この方……痴漢なのだわ……！ だって……』

こんなにも堂々としている。男とは言え、裸を他人に見せて。そして…

『お……大きく……勃起してるわ……！』

ここは、学校の敷地内。そして、絶対男子禁制の女子用シャワールームである。そんな場所に、堂々と裸で侵入し、全裸の姿を晒し、あろう事が男性器をいきり立たせている。こんな事が出来るのは、正気の人間では無い。お嬢様育ちの瑞穂でも、即座に理解出来た。自分の身に、危機が迫っているのだと。

『ここは、学校ですわ……！ すぐ傍に、多くの生徒が……！ プールには、教員が…』

大声を出せば、すぐに誰かが気付くだろう。そう思い、恐怖を抑えながら、息を吸い込む。出来るだけ大きな声を出して、この場の異常事態を伝えるのだ。そう思った矢先。男が、目にも止まらぬ速さで動き、瑞穂の傍まで迫る。

「きゃ……」

声を出す間も無く、男の手が瑞穂の首を掴む。気道を塞ぎ、声を上げられないように。

「……っ！！ ——っ！！」

声を出せない事に気付き、自分の絶望的な状況を理解する。声が出せないのだ。この場に、誰かを呼ぶ事が出来なくなっている。

「や…………め……」

男の手が、尚も瑞穂の首を締め上げていく。



『このままでは……殺されてしまう……っ』

瑞穂は思った。この目の前に居る男は、痴漢などでは無い。明確な殺意を持った、異常者なのだ。それが、はっきりと分かる。自分の首を締め上げる手の力。そして、自分を見つめる、いやらしい顔。それは、人を殺す事に喜びを感じる、キ○ガイの目だった。瑞穂は、バスタオルを持つ手で、男を押し退けようとする。ばらりと落ちるタオル。身体を隠すものが無くなり、豊かな乳房や、濡れて肌に張り付く陰毛が見える。しかし、そんな事は気にしていられない。命の危機なのだ。身体など隠している場合では無い。先程までは、女としての貞操を守る事が急務だった。しかし今は、何よりも命を守る事が優先されていた。今まさに助けが来て、他の生徒や、教員などに裸を見られる事など、二の次三の次だった。

「……………っ、……………っ！ ——っ！！」

どんなに抵抗しようにも、男の手はびくともしなかった。元々、女の細腕である。屈強な男に、力で及ぶ筈も無い。首を締め上げられ、呼吸も出来ず、力が入らない。もう、抵抗どころか、助けを呼ぶための声すら、出せなかった。

「声を出すなよ、殺さなきゃならなくなるだろ」

男は、そんな事を言った。瑞穂は、息が出来ず、意識が朦朧とした中で、それを聞いた気がした。男は、瑞穂を殺すつもりがあるのかないのか、その首を締め上げる手を、緩める気配は無かった。

シャワーの水音が響く、バスルームの中。全裸の瑞穂が、全裸の男に首を絞められている。時折、首を絞める手を緩め、即死しないように。それは、気を遣っているというよりは、簡単に死なないようにして、出来るだけ苦しんでいる姿を見て、楽しんでいるかのようだった。

「……え……あ……あ……あげ……」

手足をばたばたと動かし、苦悶に表情を歪める瑞穂。母譲りの美しい顔が、見るに堪えない形となる。男は、その醜く悶絶する瑞穂の姿に、明らかに興奮していた。首を絞め、その様子を眺めながら、ペニスを限界まで勃起させている。

「あーあ、美少女が台無しだな、伊与田瑞穂」

男は、瑞穂の名前を呼ぶ。瑞穂がこの学校に通い、放課後に部活を手伝った後、一人でシャワーを浴びる事を知っていた。男は、ストーカーであり、異常者だった。随分前から、瑞穂の美貌に目を付け、襲う計画を立てていたのだ。

「お前がいけないんだぜ、可愛いから」

容姿端麗、スタイル抜群のお嬢様である瑞穂。キ○ガイに目付けられ、襲われるのは運命だった。

「ほらほら、いいのか？男にオッパイ見せて。箱入りお嬢様なんだろ？嫁入り前の女の身体、そうそう他人に見せていい筈は無いぜ」

男は、瑞穂の首を掴んだまま、身体を揺らす。軽い瑞穂の身体は人形のようにがくがくと動き、乳房が揺れる。高校生とは思えない、瑞穂の豊満な乳房。形も美しく、柔らかさと弾力溢れるそれは、男を誘惑し、更に興奮させ、勃起させる。

「……………」

酸欠で、意識が朦朧とする瑞穂。最早、身体に一切力は入らず、腕も足も上がらない。抵抗どころが、乳房を隠す事すら出来ない。男にされるがままに、乳房を晒し、首を締め上げられ続けていた。

「何だ？その顔。もしかして喜んでんのか？」

完全に気道を塞がれ、呼吸が不可能となった瑞穂。命の危機に、脳内物質が過剰分泌し、瑞穂は死への恐怖を忘れていた。脳内麻薬とも言われるそれは、瑞穂を苦痛から、快楽の世界へと誘う。婚約者との恋愛経験から、性的な快楽の世界を知り尽くしている瑞穂は、脳内物質の作用により、かつてないエクスタシーの体験をしていた。絶頂の快楽に、全身を震わせ、苦悶に満ちていた筈のその表情は、快楽に支配され始めていた。

「おいおい、お前今、首絞められて、殺されようとしてんだぜ。何感じてんだよ、この変態お嬢様が…！」

男は、瑞穂の首を絞めながら、言い放つ。男の罵倒に、瑞穂はさらに快楽を感じ、全身をがくがくと痙攣させていた。死の狭間にいる瑞穂は、もう全てが快楽となり、性的な喜びとなっていた。



「お前、会ったばかりの男に裸見せて、今まさに殺されるトコなんだぜ。何でそんなに嬉しそうなんだ？これだから金持ちのお嬢様は」

男は、死に瀕した際、多くの人間が快楽の世界に突入するという事実を、経験則から知っていた。男は、殺人鬼であり、人を殺す事に慣れていた。

「……………」

もう、この世のどこも見ていない目を男に向けながら、瑞穂は快楽の世界を漂い、身体を痙攣させ続けている。意識は全て、快楽に支配され、淫乱な本性を露わにする。何度も何度もイキまくりながら、愛液を垂らし続ける。限界まで乳首をそそり立たせ、男に乳房を見せる事に喜ぶ。かつての、理知的な凛とした表情は微塵も無く、瑞穂はもう、性的な快楽を貪るだけの存在と化していた。

「オッパイ見られてそんな嬉しそうにしてるの、お前ぐらいだぜ、この淫乱お嬢様が…！」

男は、そう言って瑞穂の首を更に締め上げ、その身体を持ち上げる。瑞穂は、声にならない声を上げ、身体をびくん！と反らせた。足が地面から離れ、全体重が首に負荷を掛ける。気道どころか、血管までも塞がり、瑞穂の生命活動を止めようとしていた。



「……………」

衰弱した瑞穂は、もう一切、自分からは動かない。全身を、びくんびくんと痙攣させ続けるだけだった。もう目は見えず、瞬きはしていない。突き出された舌が、涎を垂らし続ける。男の明確な殺意に、快楽を感じ続ける瑞穂。もう動かせない身体を、男に惜しげも無く見せ付ける。大好きな婚約者の男との、甘く淫らなセックスの時のように、『オッパイ見て！私のオッパイ！オッパイ見ながらポッキしてセックスして！射精して！私のオッパイ見ながら！』とでも言わんばかりに、乳房の先を固く尖らせていた。

「あー可愛い……、イクぜこんなの……、もうイク……！」

男は、瑞穂の淫らな姿を見ながら、興奮の絶頂へと達しようとしていた。両手とも、瑞穂の首を締め上げている。ペニスに触れていないのにも関わらず、男は瑞穂の姿を視姦しているだけで、射精しようとしていた。男は、殺人鬼である。最も興奮するのは、人間の『死』だった。ペニスへの刺激など無くても、人の死が、男を射精させる命令を脳が出す。それが真正のキ〇ガイである、男の性癖だった。

「ああ……！エロい……！ほら、イクぜ……！イク……！ああ……出る、射精するっ……！ああ……！」

男は、絶頂への階段をのりながら、瑞穂の首を絞める手に、力を込めていった。瑞穂は、苦痛と快楽を同時に味わいながら、迫り来る死に、更に興奮し、全身をびくんびくんと痙攣させながら、イキまくっていた。

「あーイクッ！！イクッ！！ああ！！ほら死ねっ！！自分を殺す男にオッパイ
見せながら興奮する淫乱お嬢様！！あっ！！あ——っ！！ンッ！！」

今まさに絶頂に達する瞬間。男は力の限り、瑞穂の首を絞める手に力を籠める。
ぐきゅっ！！と鈍い音がし、瑞穂の首が粉碎される。殺人鬼である男の腕力は
異常で、その怪力による握力は、女の細い首を軽く握り潰し、気道から血管、
筋肉や神経、骨に至るまでをまとめて粉碎した。びくんっ！！と身体を痙攣させ、
舌を更に突き出し、白目を剥く。断末魔の痙攣に、瑞穂の乳房が、一際大きく
揺れた。男は、その乳房を見ながら、瑞穂が今まさに絶命したのを感じ、猛烈な
興奮を感じる。一気に射精に達する男。限界まで勃起し、そそり立ったペニスの
先から、小便のように飛び出す白い精液。

「ああっ！！ああ——っ！！気持ちいい！！ああっ！！可愛い！！いいトコ
のお嬢様がっ！！俺の手で殺されてるっ！！今まさにっ！！俺が美人JKを
ブチ殺してるっ！！ああ！！」

どびゅっ！！どびゅるっ！！どぶっ！！どぶっ！！びゅるっ！！びゅる——っ！！
恐ろしい勢いで吐き出され続ける精液。異常者である男は、射精量も普通では
無かった。人を殺す事に、この上ない興奮を感じる、殺人鬼の男。一生に一度
きりの、人の絶命の瞬間は、最高の快楽をもたらし、男を絶頂による射精に導く。
男はいつも、女をそうして扱い、殺し、犯し、射精して来た。

「ああ……すっげー出る……！止まんねえ……！ああ……！」

びくびくっ！！びくんびくびくっ！！断末魔の痙攣に、腕や脚ががくがくと振り動かし、
乳房を揺らしまくる瑞穂。まるで、セックスの際に、乳房を揺らして腰を振り、
恋人を誘惑し、絶頂に導こうとするかのように、

「はあっ、ああ！ほら、出てるぜ！エッチな身体した、
淫乱お嬢様！ああっ！！まだまだ出るっ！ほらっ！
精子喰らいなJKっ！」

男は、既に事切れた瑞穂の、魅惑の裸体に、
思う存分精液を吐き掛けて行った。

「可愛い……」

やがて、射精も終わり、落ち着く男。目の前
には、全く動かなくなり、虚空を見詰めながら、
首を締められたまま、地面から吊り上げられ、
裸の姿を晒す、女子高生の死体があつた。
男に乳房を見せ、精液を下半身に浴びているにも
関わらず、恥じらう様子も、嫌悪感を示す様子も
無かった。もう死んでいるのだから、当然だった。

「ついさっきまで、生きてたんだよな……まさか
自分が今日、こんな形で死ぬなんて、思いも
しなかっただろうな……ああ……そう考えると…」

男は、再び興奮していく。射精を終えたばかりだとい
うのに、勃起は治まる気配は無い。

「ああ……出るよ、出るっ！！ああ！！」

死体に興奮する、ネクロフィリアの性質も持つ、
殺人鬼の男。目の前の、女子高生の無残な
死体に、一気に興奮の絶頂に達する。再び、
吐き出される精液。最初はゆっくりと、次第に
激しく発射されていく。

「出るよほらっ！すっげー出るっ！ああ！こんな
出るの初めてだっ！お前がいい女だから！
あー出るっ！止まらないっ！！」

びゅるっ！！びゅるっ！！

男は、既に精液塗れの瑞穂の裸体に、更に精液を
吐き出していった。



「はあ、はあ、はあ、チンポボッキするっ…！ほら、こんなにボッキしてるぜ瑞穂！」

男は、瑞穂の首を掴み、その身体を持ち上げながら、もう片方の手でペニスをしごきまくる。既に、何回めかの射精の後だった。さすがにもう、刺激無しではイケない。

「待ってな、まだまだ犯さないでやるよ。処女のまま、オッパイ見せて俺をイカせな…！
こんだけエロい身体した美少女だ…！セックスしなくてもイキまくれるぜ……！！」

男は、セックスよりも、『人を殺す』『死体を見る』事に興奮する性質だった。目の前に死んだ人間が居れば、女でなくても、男でも動物でも、余裕で射精出来る。真正のキ○ガイだった。

「ほら、皆見てるぜ、どんな気持ちだ？人に見られながら犯されるのって」

周囲には、水着姿の女子が数人、転がっている。部活を終え、シャワーを浴びに来た、女子生徒達だった。彼女らは、悲鳴を上げる間もなく、男の手によって、即座に殺害された。最後の一人は、即座には殺さず、拘束し、声を上げられないようにしながら、同じ学校の女子生徒が、男の手によって汚されるのを見せ付けられながら、やがて殺された。男は、その時も勃起し、射精した。

「やっぱ美少女じゃねーとボッキしねーな。お前のせいだぜ？お前が可愛過ぎて、他の女じゃ満足出来ねー。普段は生きてる奴なら、何でも射精出来るのによ」

男は、女生徒が数人居るというのに、瑞穂の身体ばかり見て、射精していた。正直、瑞穂以外の女子は、普通的女子である。瑞穂は、絶世の美女だった。殺人鬼と言えども、やはり美女の方が興奮する。

「でも、周りに殺したばかりのJKが転がってるってのはいいな…すっぱーボッキするぜ……！！」

男は、瑞穂が同じ学校の生徒の見てる前で無残に殺され、その裸体を晒したまま、視姦されているという事実、興奮していた。

「ほら、イクぜ……！みんなの見てる前でオッパイ見せながらザーメン発射されな！瑞穂！ああっ！！」

びゅるっ！！
再び、射精する男。大量に発射されるそれは、何度目かの射精にも関わらず、凄まじい勢いで飛び出し、瑞穂の腹部を、乳房を汚す。もう、股間の辺りは精液塗れで、真っ黒い陰毛が白く染まる程だった。

「さあて、そろそろ……」

瑞穂への視姦にも飽き始め、犯そうとする男。勃起したペニスをしごきながら、瑞穂を床に寝かせ、足を開かせる。もう死んでいる瑞穂は、膣が濡れる事は無かったが、精液塗れなので、潤滑油には困らない。

「みんなの見てる前での初体験だぜ……！淫乱お嬢様JK……！！」

男は、瑞穂の身体を犯し始めた。



「何だ、処女じゃねーのかよ……」

男は、瑞穂の身体を犯しながら、その事実を知る。処女とそうでないのでは、感触が違う。レイプと殺人を繰り返して来た男は、女の全てを知り尽くしていた。

「ま、こんだけ美人じゃな。セックスしないではいるのは不可能か」

女が美しいのは、男を誘惑し、セックスをするためだと、男は知っていた。それ以外に、女が魅力的になる理由など無いのだから。何より、女自身も、美じくなればなる程、セックスに対する欲求が強まる。セックスを嫌う女は、美しくなる必要など無いのだから。

「まったく、綺麗な女ほど淫乱だからな……美人で処女なんて、幼女にしかいねーぜ」

腰を振りながら、男は過去に殺し、犯した女の事を思い出す。思春期を迎えた女で、美しいまま処女である女など、皆無かった。

「処女で、こんなおっぱい大きい女、居ねーよな」

男の知る限り、美人で処女だった女は、小学生以下しか居ない。下手すれば、12歳くらいでもう、処女では無いJSも居たほどだった。今時の少女は、知識もあり、色気付くのが早いしだった。

「あー巨乳処女とやりてー」

男は、死体なら誰でも勃起し、射精出来るが、普通のセックスとなると、相手が美人で巨乳でなければ、あんまり楽しくない、と考えていた。自己中で我儘なもの、キ○ガイの特徴だった。

「エロいぜ……！ ああエロい……っ！ いいトコのお嬢様だけあって、オッパイエロい……！ デカくて美乳……っ！」

既に動かなくなった瑞穂の身体を、激しく犯しまくる男。死んでいるにも拘らず、瑞穂の形の良い乳房が、男の目の前で、まるで生きているかのように、悩ましく形を変えて揺れ動く。柔らかく、弾力溢れるそれは、恋人である婚約者の男を、幾度となく勃起させ、射精させて来た。

「死んでも男をボッキさせるなんて、とんだ淫乱女だな、エロいオッパイのお嬢様、瑞穂ちゃんよ……！」

ぷるんぷるんと揺れまくる乳房を眺めながら、瑞穂の瞬きの止まった顔を見る。これだけ淫らな裸体を晒しておきながら、実際は死んでいるという事実が、男を興奮させる。

「ああいく！ イクっ！ オラっ！ エロいオッパイ見せ付けながら死んでんじゃねーよ淫乱お嬢様！ あー出るっ！ んっ！！」

男は、表情一つ変えない瑞穂の白い肌を見ながら、膣内に思い切り射精した。



瑞穂を、徹底的に犯しまくり、中出し射精を繰り返した男。思う存分、精液を吐き出し、膣内を精液で満たした後、その美しい裸体に、精液をぶっ掛けまくった。死体となった瑞穂は、その全てに、まったくの無抵抗だった。犯されても、膣内に射精されても。生暖かい精液を、乳房に、顔にまで掛けられても。想い人にすら、された事の無い顔射。しかし、既に死体である瑞穂は、もう羞恥心も、嫌悪感も存在していなかった。死んでいるのだから、何も感じる筈が無い。レイプも、裸を見られる事も、見知らぬ男からの中出し射精も、全て無抵抗に受け入れ、されるがままになっていた。

「おっ、結構可愛いオッパイ。さすがはJK。水泳部だもん。そりゃ容姿が良くなきゃ、水着姿何てわざわざ人に見せねー」

男は、ふと思出し、周囲に水着姿の女子高生が、数人転がって居る事を思い出す。せつぷくなので、楽しむ事にしたい。一人一人、水着姿を眺め、射精していく。何せ、女子高生である。水着姿を見せる、水泳部の部員。容姿の悪い女が、水泳部に入る訳が無かった。瑞穂には劣るとはいえ、皆それなりに女子だった。

「ちゃんと皆オッパイあるな。まあ高校生でオッパイ無い女なんて存在しねーか」

水着姿のせいか、僅かな膨らみでも、その形が分かる。際どいデザインの競泳水着は、思春期の少女達の美しさを際立たせていた。

「この娘はおっぱい小さいめだな。可愛いぜ……ほら、もうイク……っ！んっ！！」

びゅっ！と瞬きの止まった顔に、精液を発射する。次々に吐き出されていく精液を、顔に、口に、髪に、水着の胸の膨らみに、順番に掛けていく。少女は、あっという間に精液塗れとなった。その様子を、光を失った瞳で、見続けている瑞穂。見ているのではなく、死んでいるので、同じ方向を向いたまま、顔を動かさないだけなのだが。

「ほら、見てるぜ瑞穂ちゃんが」

ストーカーしていた瑞穂以外、名前が分からないので、名れを見て適当に呼ぶ男。

「ああ……桜井ちゃん……可愛い……ほら、オッパイ見せな……！ああ可愛い、イク……！んっ！！」

水着姿に飽きた男は、死体となった少女達を、今度は半裸にしながら、犯していく。数人の少女達の死体が転がる、シャワールーム。皆、それぞれが、個性を持ち、違う身体を持っている。胸が小さい者、ウエストがあまり細くない者、筋肉質な者。その差が、何度も射精した男に、新鮮な興奮を齎す。

「はあ、はあ、伊倉ちゃんだっけ……、もっとダイエットしな。そんなんじゃカレシ喜ばないぜ……！俺は可愛いと思うけどな……！」

「あ、君は処女なんだ……唯一の処女だな。まあ当然か。これが普通だもん。じゃ、中出しするぜ……ほらっ！！」

男は、全裸の少女達の死体を、シャワールームの中で、犯し続けた。

「オッパイ小せーな……よくこれでカレシ出来たな。性格エロいのか。どうなんだ？沢野口ちゃんよ」

物言わぬ死体となった少女の胸を、遠慮なく揉みながら、ペニスを出し入れする男。死体が相手なので、抵抗する様子も無く、安心してレイプ出来る。無抵抗なのが、自分を受け入れてくれてるようで、キ○ガイの男にとっては満足感があつた。

「ああ桜井ちゃん……！オッパイ可愛い……！こんなオッパイ小せーのに男が居て、セックスしまくりなんて最高にエロいぜ……！！ほら！チンポ好きなんだろう？この淫乱女子高生が！！出すぜ！精子出すぜ！死体になってまで男を勃起させてセックスやりまくりやがって！ほら出るっ！中出しだぜ！安心しな！もう妊娠しないからよ！！ほらほらっ！ああ出るっ！ああ……っ！！」

男は、その場に居る少女達を全て犯し、膣内に射精した。恐るべき精液の量だったが、これだけの精液があっても、その場に居る少女達は、誰一人妊娠する事は無い筈だった。全員、死んでいるのだから。妊娠などする訳も無かった。



少女達を犯し終えた後、再び瑞穂の身体を犯し始める男。
普通の容姿の少女達を犯した後のため、美貌の瑞穂の
その美しさに、新鮮な感動を覚える。

「やっぱりこいつは別格だな。見てだけでボッキするぜ」

あられもない姿で、床に転がり、こちらを見ている瑞穂。
瞬きの止まった目。驚愕の表情を浮かべ、裸の姿を晒した
まま、乳房も股間も隠さず、シャワーに打たれ続けている。
浴びせ掛けられた精液は、あらかじめ洗い流されていた。

「ああ……好きだよ、瑞穂」

まったく無抵抗の、瑞穂の足を開かせ、侵入。大量の精液の
せいで、ぬるりと入る。

「こんなに濡れて……そんなに他の女とのセックスを見て
興奮したのか？ エッチな事に興味津々なんだな、エロ
お嬢様」

ぬっちゃ、ぬっちゃ、とペニスを出入りさせながら、乳房を
揉み、唇を重ねる。まるで、恋人にそうするように。

「すっぱー可愛い……！ 生きてても可愛いけど、死んでると
もっとイイ……！！」

ネクロフィリアの男は、美少女が大好物。死んでいれば、
尚興奮するという、生粋の変態で、異常者だった。

「何回でもイける……はあ、はあ」

あらゆる角度から、様々な体位で、瑞穂の死体を犯す男。
身体を壁に押し付け、倒れないように抑えながら、腰を
突き入れていく。

「可愛い……」

唇を重ね、舌を絡めながら、相手の目を見る。真っ直ぐな
瞳で、瞬きもせずに、男を見詰める瑞穂。死んでいるのだ。
瞬きなどする筈が無い。

「ああ……ボッキする……！！」

超至近距離で、死体となった瑞穂と目を合わせる。まったく
の無抵抗であるため、自分が受け入れられていると錯覚し、
猛烈に興奮する。マグロ状態の瑞穂。本来なら、マグロは
相手を嫌っているという意思表示となり、男には嫌われる
ものだった。一部の人格障害でもない限り、好きな男との
セックスは、喜ぶのが普通だった。しかし、異常者の男は、
相手が無反応であればある程、興奮する。真性のキ○ガイ
だった。

「はあ、はあ、瑞穂っ……！」

手を繋ぎ、舌を絡めながら、腰を振り、ペニスを抜き差しする。
それは、愛し合う恋人同士のようなだった。片方が死体で
なければの話だが。

「いくっ……！ ほら、孕みなっ！ 瑞穂！ 俺の子供妊娠しな！」

男は、瞬きをしない瑞穂の瞳を見詰めながら、思い切り
射精する。いつになく、相手を楽しんでいるかと思いがたの射精
だった。



「ああ……可愛い……愛してるぜ瑞穂……」

びゅくん！びゅくん！と脈動を繰り返しながら、愛し
そうに舌を絡めていく。セックスによる、中出し射精。
愛し合う男女なら、最高に幸せな瞬間だった。瑞穂も、
婚約者とよくこうして、中出しセックスをして、愛を
確かめ合っていたのだ。もう二度と不可能だが。

その後、男は更にその場に居る女全員を犯しまくり、
射精し続けた。様子がおかしい、と訪ねて来た女教師
を殺害し、更に犯しまくり、全身に精液をぶっ掛けた。

何食わぬ顔で、男はその場を立ち去る。翌日は、
連続猟奇殺人に、マスコミやネットは、大騒ぎだった。

男は、正体不明の者達に拉致され、行方不明となる。
大物政治家の娘を凌辱し、殺害したのだ。ただで済む
筈が無い。男は、徹底的な拷問を受けた後、惨殺
された。

しかし、男は特に、抵抗はしなかった。キ○ガイなので、
死への恐怖も、痛みへの恐怖も無いのだ。むしろ、
自分が拷問を受け、殺される事を想像するだけで、
興奮し、勃起し、射精した。男は、何十時間もの間、
拷問を受けつつ、その身体を犯され、殺される事にすら
興奮し、射精しまくっていた。

男の惨殺映像は、特殊な趣味の映像収集家の間で、
重宝された。普通なら嫌がる筈の拷問に、ここまで
喜び、射精しまくる男など、完全なるキ○ガイだった。
マニアは、男のスナッフムービーを、大いに楽しんだ。
この世の中は、キ○ガイだらけなのだった。



